



「レベル」を要求する文章

「天声人語」といえば、新聞の代表的なコラムとして有名で、昔は要約の基礎練習などにもよく用いられた。最近では、字数が減ってしまったこともあるのだろうが、あまり教材として活用しているという話は聞かないし、中には「今さら天声人語ですか…」みたいなことをおっしゃる先生方もおられないわけではないが、いやいやさにあらず、未だに題材の選び方にしろ、文章にしろ、その根底にある良識にしろ、高いレベルにあるのは間違いない。むしろ、我々が新聞を読まなくなってしまっていることが、この名コラムを活用しきれない理由なのかも知れない。

ノーベル物理学賞が発表になった翌日のものもなかなかイイ文章である。引用してみよう。(10月9日)

*

(三人にノーベル賞)

授賞理由が、業績の大きさを簡潔明快に物語る。「白熱灯が20世紀を照らした。21世紀はLEDに照らされる」。青く輝く発光ダイオード、すなわち青色LEDを初めてつくり、実用化した3人にノーベル物理学賞が贈られる▼赤崎(あかさき)勇さんと天野浩さん師弟の発見を外国誌が「セレンディピティ」と紹介したことがある。思わぬものを偶然に見つける力といった意味だ。また、製品化を進めた中村修二(しゅうじ)さんは、その成功を宝くじに当たったようなものと著書に書いている▼むろん3人の偉業がただの偶然であるはずはない。赤崎さんは他の研究者が見限った窒化ガリウムという材料にこだわり、実らせた。小学校時代の先生の口癖を今も反芻(はんすう)する。「カンツケ」。故

郷鹿兒島の方言で「囃(か)みつけ」。諦めるなという教えだ▼中村さんも「非常識に挑戦しなければ、独創性のある研究などできない」という信念を貫いた。青色LEDを開発すると決めると、同僚とのつきあいを一切絶って、ひたすら実験を繰り返した▼孤独な闘いを支える理解者に恵まれた点も共通している。赤崎さんは松下電器時代に、創業者の松下幸之助から「やってみなはれ」の言葉もらった。中村さんも勤めていた日亜化学工業の創業者から「やりなはれ」と、お墨付きを得ている▼〈人生においては何事も偶然である。しかしまた人生においては何事も必然である〉。赤崎さんが著書で引用している哲学者の三木清の言葉だ。不撓不屈(ふとうふくつ)の精神の源なのだろう

*

受賞内容が簡潔に紹介され、三人の人物像がエピソードを通して浮かび上がる。そして、その三人を支えた周囲も紹介しながら、最後に三木清の引用と四字熟語によって簡潔にまとめる…。実にみごとな内容と構成というべきだろう。コラムとはこうあるべきだといった典型を示している。

ただ、逆にいえば、三木清を知らない人にとっては???かも知れないし、まあ君たちなら大丈夫だとは思いますが、「不撓不屈」の意味が分からなければ、これまた???となってしまうだろう。その意味では、読む人間にある一定の「レベル」を要求する文章でもある。君たちには、ぜひそのレベルに到達してほしいと思うし、そのためにも是非天声人語に親しんでもらいたいと思うのである。